

超短編⑰

「クラブ・ビューティドッグ」(20020828)

犬好きの友人に連れられて、銀座6丁目の「クラブ・ビューティドッグ」に行ってきた。今話題のドッグ・パブの元祖がこの店である。

僕は子供の頃、雑種犬を飼っていたけど、それほど犬が好きじゃなかった。散歩にも、いやいや連れて行っていた記憶がある。気が乗らない僕を無理矢理誘ったT君は、大の犬好き。

「今は1人暮らしだから、犬を飼うことは残念ながらできない。早く結婚して、ゴールデンレトリバーを飼いたいなあ」と、現在、犬を飼いたいがために、人間のお嫁さんを探している。

さて、「クラブ・ビューティドッグ」はさすがに高級店だけのことはあり、美しい犬をずらりと揃えている。

ママ(この店のオーナーでもある。人間です。)に訊いたら、「常時30人は出勤しています」とのこと。

ママは「写真の中から、どうぞお好みの娘をお選びください」と言って、ファミリールストランのメニューの様な、美女(美犬)カタログを差し出した。

T君は、ご指名を決めていたようで、「クララちゃんをお願いします」とメニューも見ずに注文した。

僕はメニューを開くと、ゆつくり1人1人(1匹1匹)の写真を丁寧に眺めた。

T君が注文したのは、やっぱりゴールデンレトリバーだった。

「マルチーズ、コツカースパニエル、コーギー、ラブラドルレトリバー、パピヨン、初めて見る犬ばかりだな。・・・じゃあ、このルーシーを」と言って、僕はダルメシアのルーシーを注文した。

しばらくすると、クララとルーシーが尻尾をふってやってきた。

僕とT君は向かい合って座っていたが、彼女たちはそれぞれT君と僕の横に座った。

T君はすっかり目じりを下げて「やあやあクララちゃん、お久しぶりい。元気だったあ」と言って、早速ゴールデンレトリバーに挨拶をしている。

こいつだいじょうかな、とT君を心配しながら、僕も「初めまして、ルーシーさん」とか言っていた。

彼女たちは何も答えず、おりこうさんでじっと座っているだけ。

こんなの一体何が楽しいのかと思いつながら、回りを眺めてみると、すでにお客さんは20人程入っていた。女性客も5〜6人はいたと思う。

不思議なことに、どいつもこいつも皆、T君のように一所懸命犬に話かけている。

犬は何も答えていないのに、自分で言って自分で笑って納得していたりする。

僕は内心、場違いなところに来ちゃったなあ、と店に入って10分もしないうちに、既にご後悔していたが、短編のネタになるから、と自分自身に言い聞かせ、じろじろ店内を観察し続けていた。

ふと、気付くと、ルーシーが「あなた、ちっとも私の相手をしてくだらないのね」という目をして、右前足を僕の左膝に乗せてきた。

僕は思わず「あっごめん、何か飲む？」と聞いてしまった。

ルーシーは首をぐるりと90度左に回し、ママを見つけると「ワウ」とも「オウ」ともつかない短い言葉を発した。

するとママはいったんカウンターに戻ると、ドッグフードをのせたお皿を持ってやって来た。

恐ろしいことに、ルーシーさんは僕の言葉がわかるようだ。

ルーシーさんは美味しそうに、ドッグフードを頬張ると、お礼を言った。目で。

かわいい、なんて、かわいいんだ、ルーシーさん。

しばらくルーシーさんと会話を楽しんだが、ルーシーさんにご指名が入ってしまった。

僕は「ルーシーさんはやっぱり、お店の人気ものなんだね」と言った。

ルーシーさんは、尻尾でさよならをしながら他の席に行ってしまった。

代わりにアイリッシュセッターのビビアンがやってきた。

ビビアンはわがままな娘で、絶えず頭を撫でてないと不機嫌になった。

まあ、それはそれでかわいかった。

僕は「犬と心が通いあうなんて、生きてて良かったなあ」と独り言を言っていた。

そろそろ帰る時間になる頃、僕は子供時代に飼っていた黒い犬のことを思い出して、もっと可愛がってあげればよかったなあ、と反省していた。

T君はフロアの中央で、クララと踊っていた。

20年以上の付き合いになるが、こんなに幸せそうなT君を見るのは初めてだった。

僕は、「早くT君にお嫁さんを見つけてあげよう」と、ひとり心に誓うのだった。

超短編シリーズはフィクションです。念のため